

佃南小学校の課題について

- 1 【課題】 子どもたちの良い教育環境が確保できていない。
特に、1クラスの人数が極端に少なくなる2年後から学校運営はさらに難しくなる。

	6年	5年	4年	3年	2年	1年	合計	クラス数
2018年7月現在	28人	20人	8人	18人	11人	7人	92人	6クラス
2020年4月推計	8人	18人	11人	7人	?人 / 13人 <small>佃南 校区内の 現5歳児</small>	?人 / 28人 <small>佃南 校区内の 現4歳児</small>	$\frac{44人 + ?人}{}$ 最大85人	?クラス (※)

※ 児童数によっては複式学級となる可能性があり、6クラス以下となる可能性もあり
(複式学級: 2つの学年の児童で編制する学級。編成は2学年あわせて16人以下、第1学年の児童を含む学級にあっては8人以下が対象)

※ 【大阪市立小学校学校配置の適正化の推進のための指針】による分類(別紙参照)
現在区分2⇒2年後には区分1となる可能性あり

…どのような事が起こっているのかというと。。。 ↓

【教育課程に関する課題】

- ・体育科での球技において試合形式の指導ができない。道徳科や生活科など、多様な気づきや価値観の共有が難しい。
- ・音楽科での合奏や図工科での共同作品作りなど、協働的な学習活動ができない。
- ・学校行事等特別活動での体験的な学びが難しい。遠足や運動会、学習発表会などにおいて、児童が主体的に運営にかかわることや取り組む内容に制限ができる。
- ・学校で行われるすべての教育活動において、人数による制限が生じ、複数学年合同での活動にならざるを得ない。しかし、同一単元でも学年ごとの学習内容が異なり、児童の発達段階も異なるため、学習の成果も同一学年のみで実施する場合の成果には及ばない。算数科や国語科、理科、社会科などは、当然2学年合同での授業は設定できない。
- ・6年間クラス替えができないことから、こどもや保護者の人間関係が固定化する傾向がある。

【人的配置に関する課題】

- ・教員の配置定数は、学級数で決まる。佃南小学校は、特別支援学級を含め7学級。校長、教頭を除いて教員は9名の配置となっており、運動会や学習発表会、校外活動の引率なども全員体制でようやくできている状況。
- ・林間学習や修学旅行では、特別支援担当や養護教諭は、引率教員にあげざるを得ず、代休や時間外勤務の振り替えなどを取得すると、教員の半数が取得することになり、必然的にスライドしながら取ることとなり必要な休養を教員が主体的に適切な時期にとることができない。
- ・一人の教員が、校務を多岐にわたって担当することになる。複数人でのチェック体制を維持することが、人的にも時間的にも困難であり、一人で何役もこなさざるを得ない状況で教員の負担は多大となっている。また学年に複数の教員がいらないため同学年でのカバー体制が構築できない。

【学校の財政運営、行事における保護者負担に関する課題】

- ・特に児童数一桁の学年における遠足などのバスを使う学校行事では、バス料金の個人負担額が大きくなるのでバス利用そのものを見直さざるを得ず、目的地や日程を見直さなくてはならない。とりわけ宿泊を伴う修学旅行や林間学校では団体利用を前提とした宿泊施設の利用ができなくなる。児童数が極端に少なくなる2年後には今まで通りの実施は不可能となる。
- ・教育課程にかかる資金として、校長戦略予算が配布されるが、学級数に応じた資金となるため、次年度以降入学者がなくなったり、複式学級*になれば、現在実施している演劇鑑賞やイングリッシュディ、外部指導者招聘による出前授業などの展開ができなくなる。
- ・学校維持運営にかかる予算も児童数減少に伴い全体予算は削減され、建築後30年を迎える校舎等には、老朽化も生じており、維持補修や突発的な修理、交換などに迅速に対応できなくなりつつある。(体育館水銀灯や門扉、インターホン、放送設備 等々)

2 解決方法は... 一定規模の子どもたちが共に学ぶ環境を作る。

3 【適正規模(※大阪市立小学校学校配置の適正化の推進のための指針による)】12～24学級＝学年複数学級

【適正規模(12～24学級＝学年複数学級)の小学校のメリット】	
①	クラス替えができることで人間関係が固定化されにくく、多様な考えに触れ人間関係づくりのスキルが高まります。
②	大きな集団の中でクラス対抗リレーや球技大会、体育の集団競技ができるなど、また、音楽の合唱や合奏の際に、教育活動の幅が広がります。
③	中学校へ進学した際に生徒数、友人関係などでギャップを感じる事が少なくなります。
④	学校に配置される教員が増えるため、教員の校務の負担が分散化され、授業準備や指導研究、児童と触れ合うために割く時間ができ、児童に向き合う時間が多くなります。
⑤	切磋琢磨する環境の中で、学力や学習意欲が向上します。

4 子どもが減っていく中、適正規模を保つ方法は...

適正規模を保っている佃西小学校と統合する

対案としては①佃西小学校が佃南小学校へ統合←より多くの児童に影響が生じる

②佃南小学校の校区を広げる←学校選択制の影響により、校区を広げても児童数が増えるとは限らない

【大阪市立小学校学校配置の適正化の推進のための指針】

11学級以下の小学校については、適正配置の対象校となります。統合の相手校については同一中学校区内にあり、校区が隣接している小学校が相手校となります。適正配置対象校と適正規模校の統合は、適正規模校を存続校とします。よって、佃南小学校の相手校は佃西小学校となります。

5 小規模校を選んだけれど、統合して大きな学校へ行くことになった。 過去にも大阪市で同様の事例があります。

推計によると、統合後には各学年3～4クラスで構成され、1クラスあたり27人から31人となります。

もし2020年4月に 佃西小学校と統合すると		6年	5年	4年	3年	2年	1年	合計
児童数(推計)		91人	91人	88人	95人	109人	113人	587人
	1クラスの数	30人	30人	29人	31人	27人	28人	
	クラス数	3クラス	3クラス	3クラス	3クラス	4クラス	4クラス	20クラス

小規模校の方が子ども一人ひとりの状況や家庭環境の状況が把握しやすいのでは…。

→例えば適正規模校で1学年50人の児童が在籍している場合、1学級25人の2学級となります。

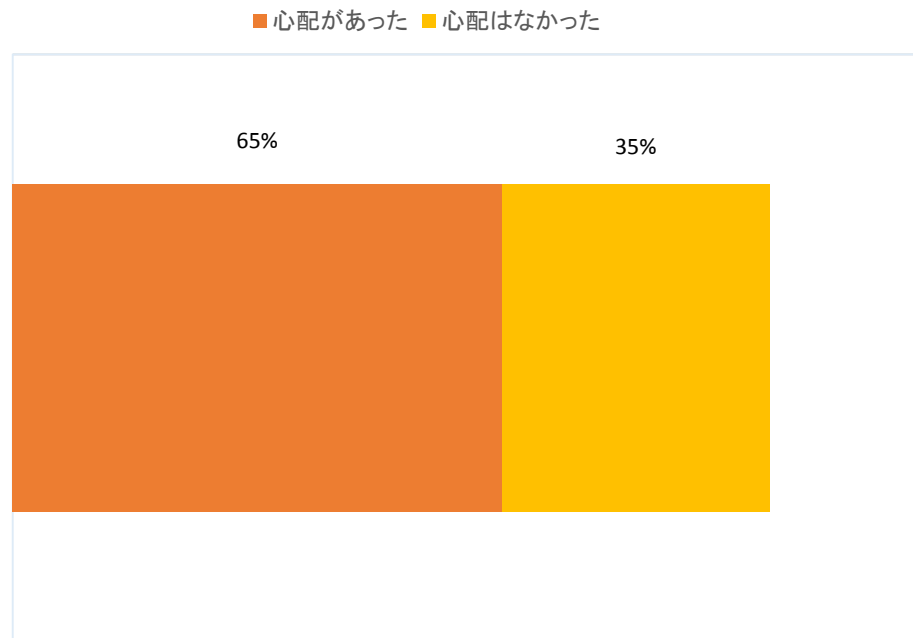
学級あたりの人数は変わりませんので、児童数が多いことが生活実態の把握がしにくく家庭と連携がとりにくいといった、デメリットに直結するわけではありません。

統合前は子どもも保護者も「学校が遠くなること」や「新しい友達ができるのか」という不安があります。
けれども、過去に統合した小学校のアンケートからは、次のような声があがっています

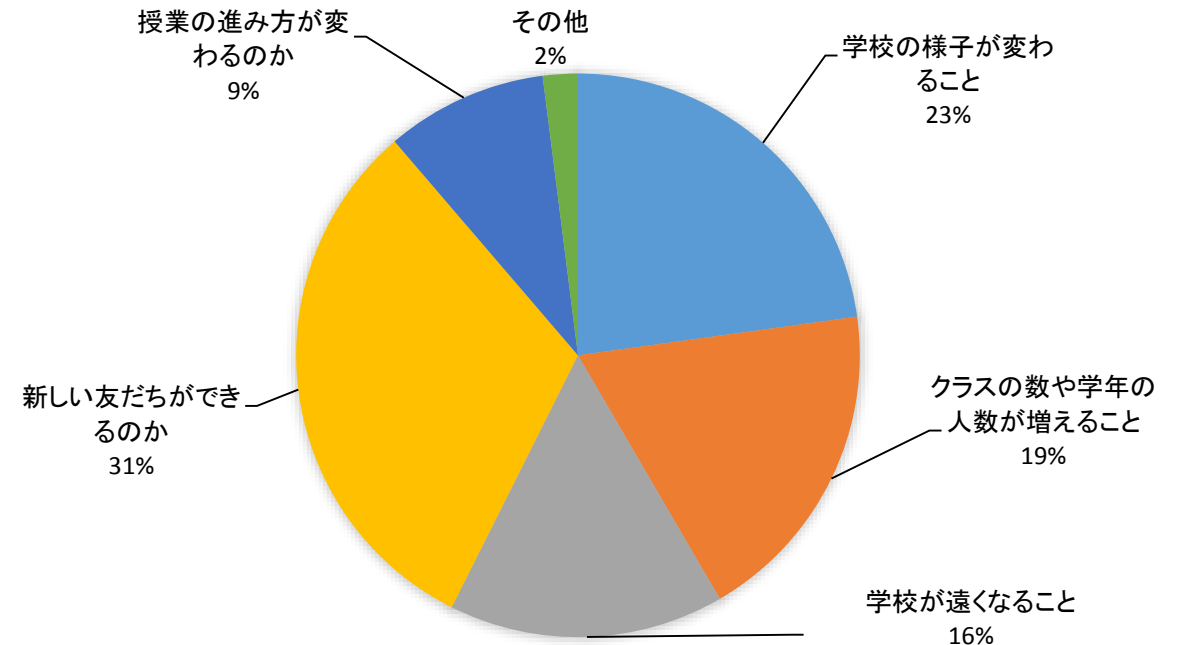
【児童のアンケート結果】

塩草小学校と立葉小学校(浪速区)、萩之茶屋小学校と今宮小学校と弘治小学校(西成区)、梅南小学校と津守小学校(西成区)、鶴町小学校と鶴浜小学校(大正区)のアンケート結果より

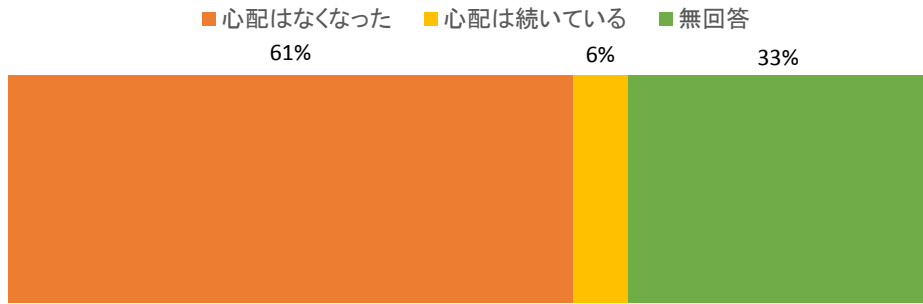
学校が統合するとき心配はあったか



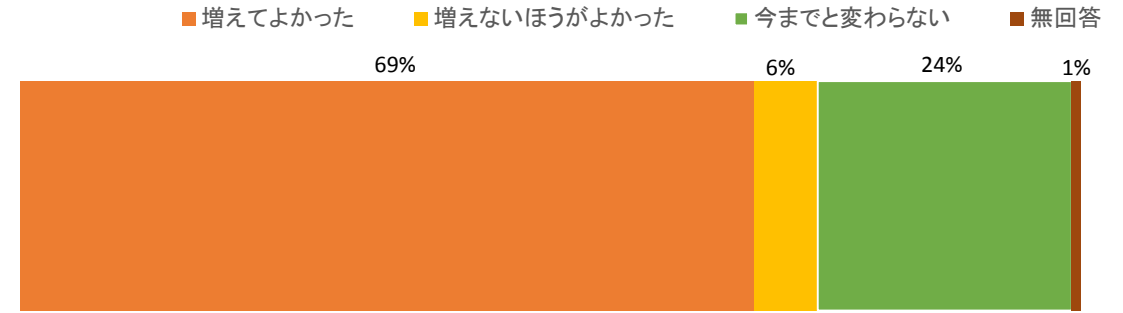
どのような心配がありましたか。(複数回答)



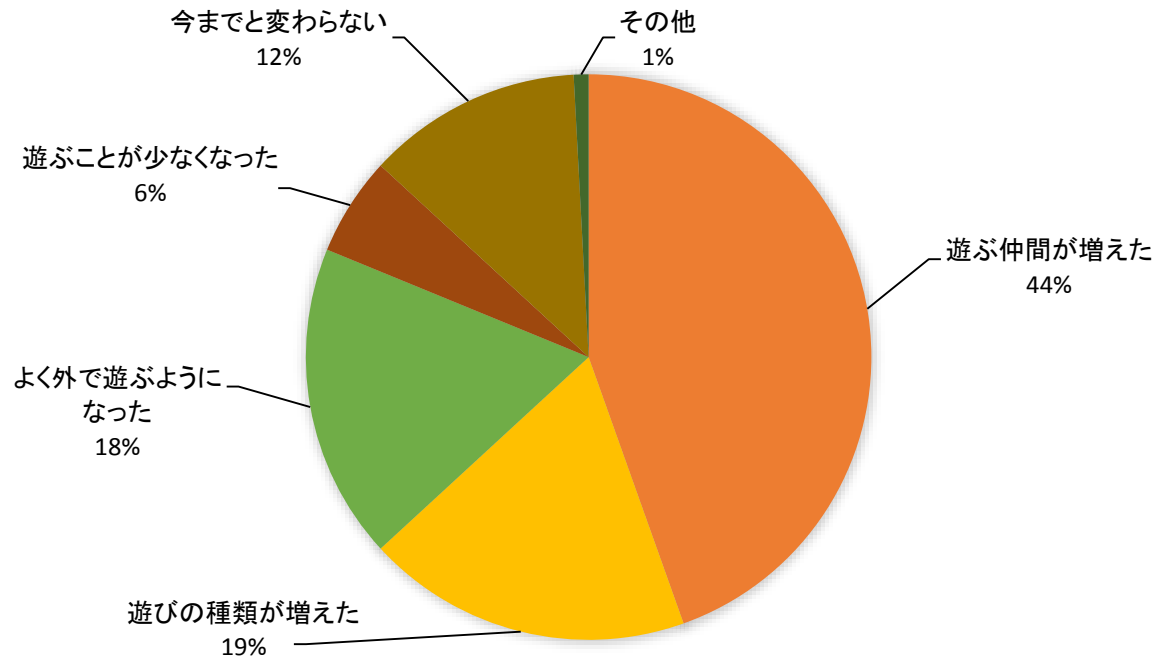
心配はなくなりましたか。



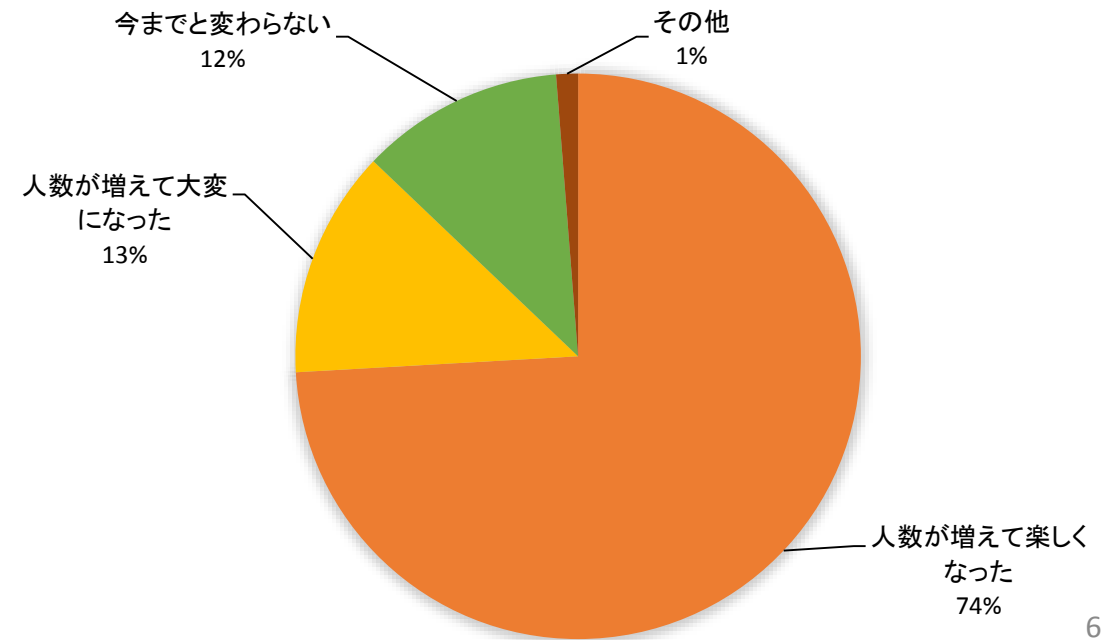
統合によってクラスの数や学年の人数が増えましたが、そのことについてどう思いますか。



休み時間の様子について(複数回答)



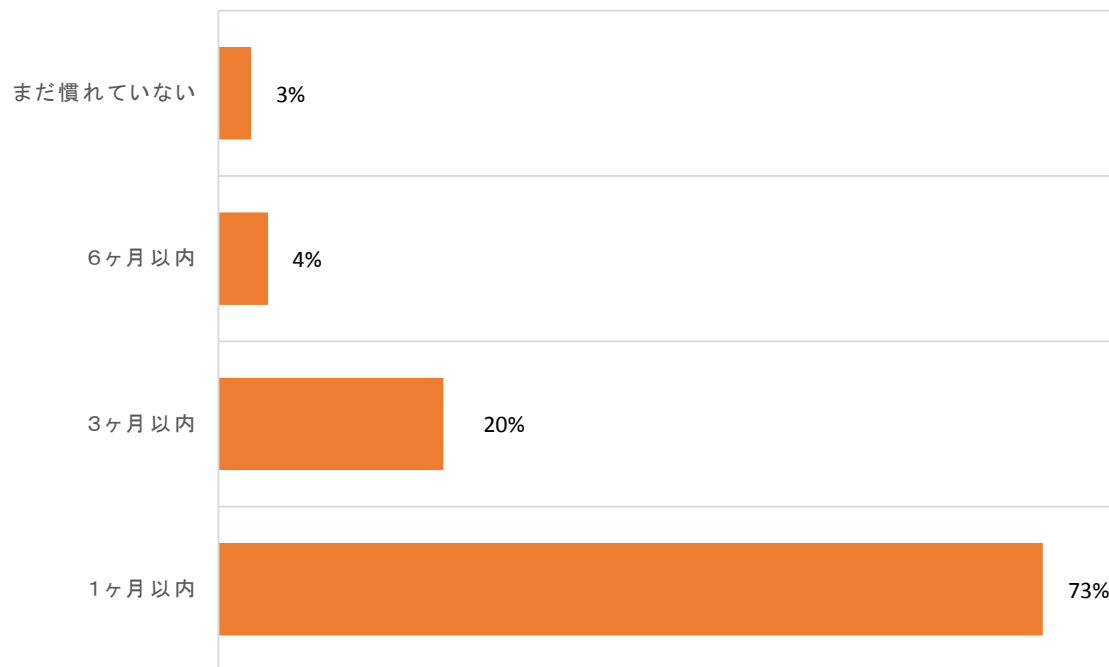
遠足や運動会の様子について(複数回答)



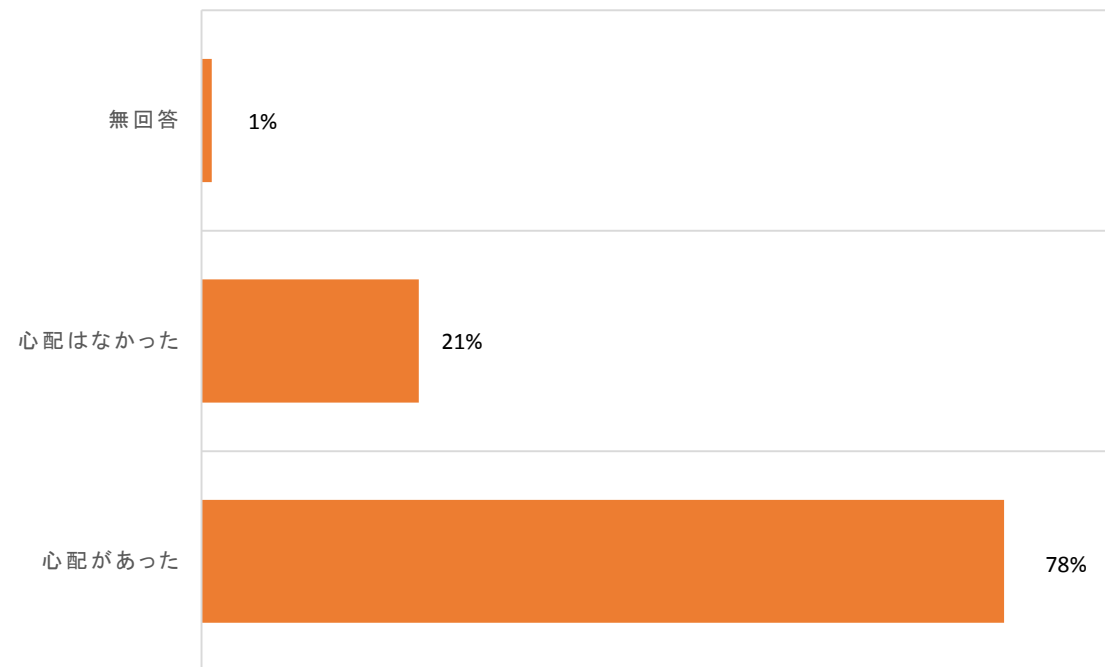
【保護者のアンケート結果】

塩草小学校と立葉小学校(浪速区)、萩之茶屋小学校と今宮小学校と弘治小学校(西成区)、梅南小学校と津守小学校(西成区)、鶴町小学校と鶴浜小学校(大正区)のアンケート結果より

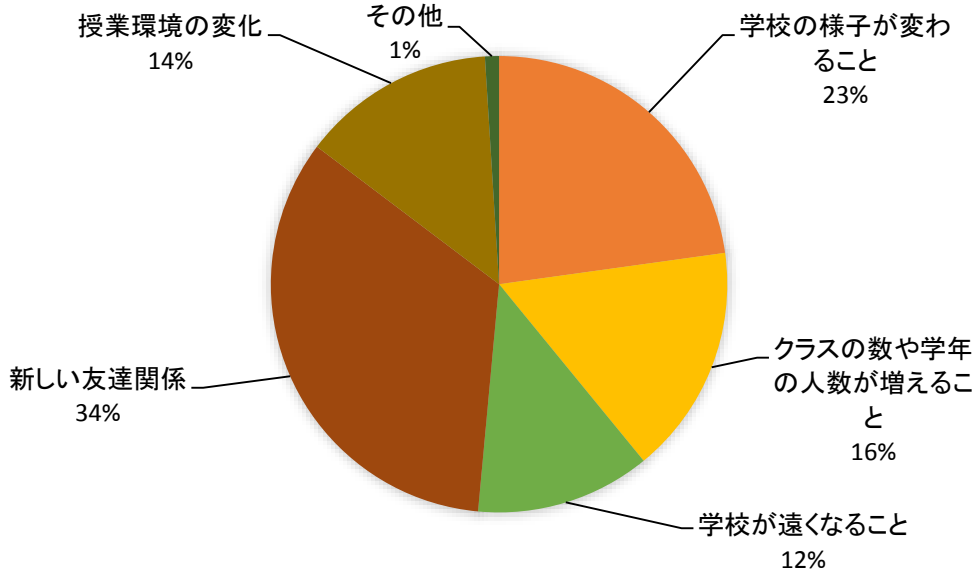
お子様が統合後の学校生活に慣れるまでにどのぐらいかかりましたか。



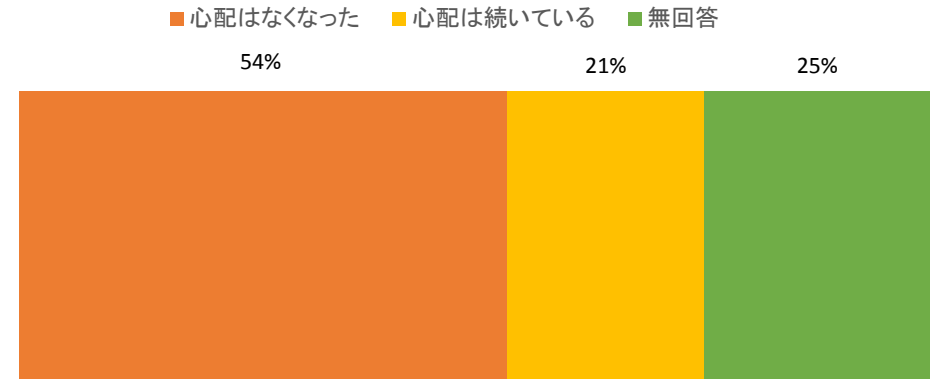
統合にあたり心配されましたか。



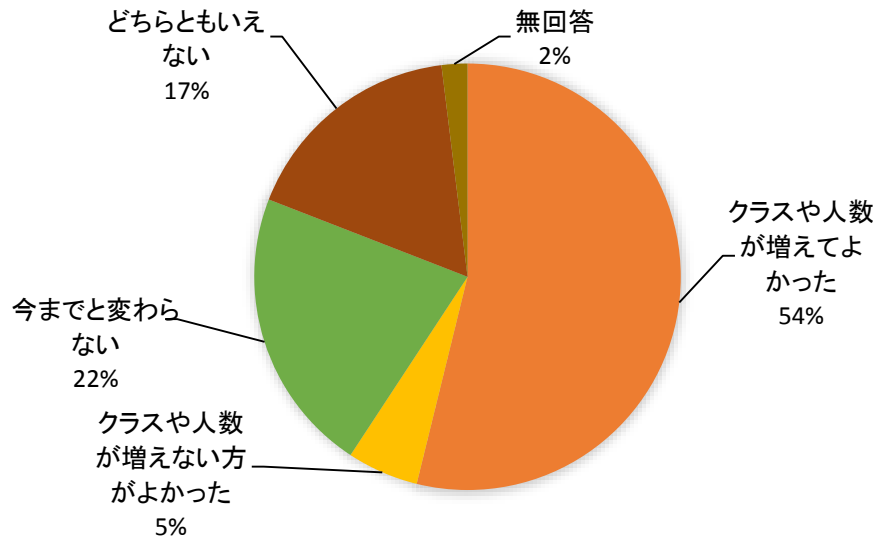
どのような心配がありましたか(複数回答)



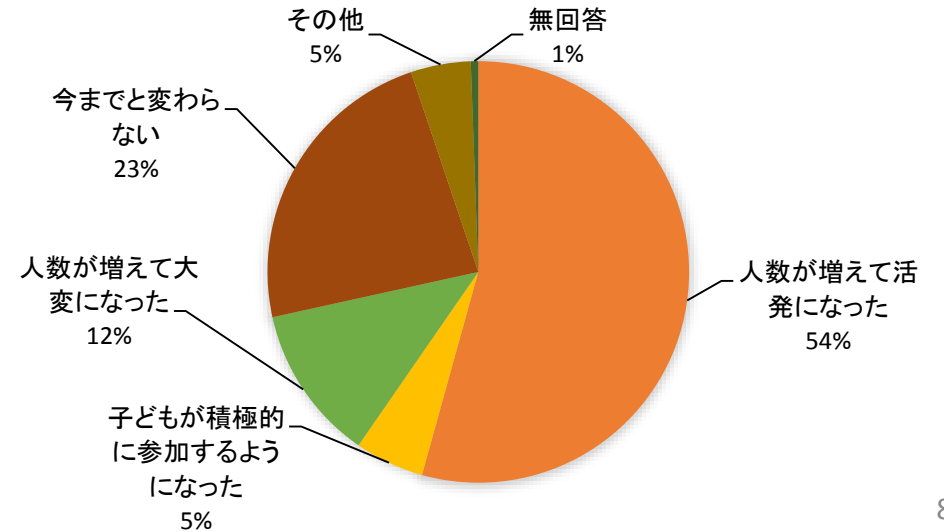
統合後心配はなくなりましたか



統合してクラスの数や学年の人数が増えましたが、そのことについてどのように思いますか。



学校行事(運動会など)について、どのように感じておられますか。



6 学校選択制との関連

制度導入の経過

平成23年12月23日 橋下前市長が学校選択制導入の方向性を決定

平成24年2月

区内在住の保育園・幼稚園・小学生・中学生の保護者9,397人を対象にアンケートを実施

回収回答数4,296票 小学校に導入することについて

賛成52.4%、反対17.5%、どちらともいえない28.1% 無回答2.0%

平成24年5月から平成25年2月 就学制度の改善についての意見交換・説明会の実施 38回、635人の参加

平成25年1月から平成25年3月

地域代表、保護者代表、学校園代表、区役所からなるプロジェクトチームにより検討を重ねる

平成25年4月

児童生徒と保護者が学校に関心を持ち、学校側もこれに応えようとすることで、児童生徒・保護者、学校、地域が連携協力して、地域に開かれたより良い学校づくりが進むことが期待できることから、小・中学校において学校選択制を導入

平成26年4月 学校選択制を利用した新1年生が各小・中学校に入学

7 ニーズの収集のために

高学年の児童、低学年の児童、支援学級の児童など、思いはさまざま。多様な思いを統合協議会の議論に取り入れていきます。